
桜花姫伝

零烙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜花姫伝

【Nコード】

N9537H

【作者名】

澪烙

【あらすじ】

都市にはびこる妖魔を祓うことができる存在、紅姫。その、紅姫、はほとんどの顔を見れず、声を聞くことも無い。そんな「紅姫」に仕えることになった新米の給仕もそんな日々が続いていたのだが……

そんな感じで紅姫中心のどたばた生活です。

紅姫

とある時代、とある世界のお話。

宮殿の奥深くには真っ赤な長い髪、真っ赤な二つの瞳を持つ娘がいました。

その珍しい髪と目のためか、一般の人にその姿を目にするものはいませんでした。

そのため、ある人にはそれをうわさとするものも少なくはありませんでした。

その娘はその容貌から『紅姫』と畏怖の念をこめられて呼ばれていました。

噂はうわさ。

しかし、噂で片付けれるようなものでは到底なかったのです・・・。

オープニング

宮殿の奥深く。侍女達からは”姫”と呼ばれる娘がいた。侍女たちでもほんの数人しかその御顔を拝見できない。給仕の者達もお部屋まで運んでもすだれによって御顔は見えない。すだれの下からは長い真っ赤の髪の毛しか分らない。しかし、その部屋の空気はきわめて高貴なもので、その不思議な空気は誰をも魅了した。

部屋には基本的に何も置いておらず、部屋の四隅には清めのお札がはってあるだけである。

今日の夕食を運びに給仕が”姫”の部屋に入った。給仕は姫に近い

ものしか着ることのできない紅色の衣服を身に着けている。髪は括らなければならぬので青色の髪をポニーテールにしている。

「失礼します。ご夕食をお運びしました。」

• • • • •

給仕は中に入って、すだねのところまで言つてそれを運んで一礼し、下がった。

「どうぞ、お召し上がりください。」

給仕の言葉に特に答えることなく、”姫”は何もせずにした。給仕もそのために何も言うことがない。

「……………それでは失礼します。」

• • • • •

給仕＆傍仕えの侍女たちの控え室

この控え室に本日最後の仕事を終えた女性が帰ってきた。両手には全く手のつけた跡のない食膳が運ばれてきた。給仕の女性はそれを片付けてリラックスできるように他の侍女や給仕がいる場所に重い足取りで向かった。なにかと疲れたので、髪はポニーテールにしたままだった。

「せんぱーい、聞いてくださいよー……姫様は今日も何も召し上がらず、何もお言いにならないし……これで三日目……・私”姫”様の給仕なんてしちゃいけないんじゃないの……先輩、助けてくださいよー!? どうすればいいんですかー!!!!!!」

「悩め悩めー、新米！！新米のくせに姫様の給仕なんてどういうこ

とよー！自分で解決しなさい！」

新米給仕である紫苑^{しおん}は、なんだか知らないうちに姫の給仕に当たっている。先輩の胡桃は髪のを解いて、背中までの茶色の髪をふわっと広げている。

さて、新米給仕の紫苑の悩みはこれだけではない。

まず、噂に聞く紅姫^{くれないひめ}が本当にいたということ。その時点でびっくり仰天。（さすがに心臓は止まりませんでしたけど！！あるていどなら信じれるという自信もありますから！！）

さらに、いきなり給仕……。確かに宮殿で働くために修行していた身なので、光栄なのだが……。多少強引にこの役職についたというかなんと言うか……。いわゆる詐欺？？的なものにはまったとも言おうか……。

まさか、アンケートに答えただけで急に働くとは思わないでしょ？？

そのまさかなんですよ。アンケートに答えたら、いきなり五級くらいぶっ飛んでこの役職に……。シンデレラストーリー並ですよ、ほんと。

まあ、そこまではいいとして。（いいんかよ！）

働くのは別にいい。仕事だし。七級昇進したのは、ラッキーで片付けよう。給料がアップしたのも事実だから認めよう！！

でも、よりによって仕えるのが紅姫って……。しかも噂によれば姫様がアンケートで抽選をしたって言うし……。それならそうと少しぐらい口利いてくれたっていいじゃないのよ！！！！！！！！（泣）

「まあまあ、そんなにあせらなくてもじきに口ぐらい利いてくれるんじゃないの??あ、・・・でもそれは少ないか・・・。」

「な、なんでなんですか」

若干、自暴自棄になつて涙を流していた紫苑はそのまま先輩である胡桃の話に聞き入った。

「声聞いたことのある人つてほんの一握りだけっていうもの。実際、姫様の声を聞いたことのある人なんて私の身近にはいないもの。」

「・・・誰かー、人との交流ができないこの役職とにぎやかなどつかの役職と変えてくれー、うちにはこの役職は合っていない・・・」

「はいはい。うちじゃなくて私!!一人称にも気をつけなさい。」

「はい。胡桃先輩は聞いたことあるんですか??私の三級上の侍女ですよ?」

「・・・はつきり言つて・・・」

ゴクリ・・・

「お世話してないから、声とかいう以前に顔もちゃんと見たことないわよ。」

ドコオオオオオオオオオオツ!

唐突な答えに思いがけず、紫苑は盛大にこけてしまった。頭の上には大きなたんこぶができた。

「あらあら、大丈夫??」

「大丈夫なのかどうかは胡桃先輩のほうですよ。それでクビになつたらどうするんですか!??」

「そうなたらそのときよっ!!」

(この先輩・・・どうしようもなくつよいー)

「そついえば、あんた今日姫からなんか指令があつたんじゃないの？」

「????なんにも聞いてないんですけど・・・」

「うーん。あらそう。・・・へー・・・」

「え、なんかまずいんですか??」

胡桃はなにか見定めるように紫苑を見てから、顎に手をあてて何か考えていた。

「ちゃんと自分の部屋の机の一番目の引き出し空けておいてある?」

「???はい。ちゃんと空けておいて、開かないようにしていますけど・・・それがどうかしたんですか??」

「あーなるほどなるほど、ちゃんと空けてあるのねー、ってなんで開かないようにしているのよ!」

「え?だって、同室の先輩に『そこ開いたらだめだからね!』って言われたんですけど・・・」

「はあー??何言つてんのよ。一番上は指令文書や連絡などが入るところなのよ!!!!!!!」

「エーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!そ
れってやばいじゃないですか!!!!!!!!!!!!!!」

「て言つてる前に早く確認しに行く!!」

「は、はい!!--!すいませーん!!」

タツタツタツタツタ・・・

紫苑はあわてふためき、よろめきながらダッシュで走っていった。もちろん、自分の部屋にあるであろうその書類を確かめるためだ。「ドジッコ、いじめられっこ、あほっこ??最後のはちよつと違うかな。・・・うーん・・・」

紫苑の同居部屋

急いで自分の部屋に戻った紫苑は机の一番上の引き出しを見た。中には書類が溜まりまくってる。紫苑はそれを見た瞬間に体中の血の気がサーツと引いていくのが感じた。

（やばいやばい。・・・これは明日の夜までの書類・・・良かったほとんどが今週末までだー・・・いやいや、問題は紅姫の・・・つてやっぱりあったー！！！！！！）

紅姫の書類は紙自体が紅く、すぐにそれだと分かった。

（はははー！ー！、期限今日だー・・・、トホホ・・・）
とりあえず、ぱつと目に入った数字が今日だった。

（クビだー・・・）

そう、思いながらもとりあえず書類に目を通した。

「えー、何々、『華の月の二十七日、仕事が終わった後、霊峰山に花を取りに行ってください。』

追伸：もちろん、これからの仕事に影響するから頑張ってね

紅姫』

・・・これからの仕事以前に現在の仕事すらきちんとできてませんよーっだ・・・って、紅姫ー！ー！？」

「ちょっと、黙ってくれない？もう寝るんだから。」

ほん

とにこれだから新米は・・・」

「あ、すいません。セツナ先輩・・・」

（まだ間に合う！！・・・よね？！）

紙を持ったまま紫苑は急いで部屋を抜けて、霊峰山に向かった。

物語の始まりはいつだって唐突

「胡桃、今日何日だっけ??」

「今日は華の月、二十七日ですよ。姫。」

「ふーん、華の月、二十七日か。．．．なにか忘れているような気がするような、しないような．．．?」

紫苑が今日の仕事を終わらせた三十分後。胡桃は姫がいる部屋に入り、御簾を上げて姫のお話し相手になっていた。

そうしているうちに現在に至る。書いたとおり、姫は重要なことほど物忘れが激しい。

「うーん……うーん……何かわかるー？胡桃。」

「そ、ですな。……そういえばドーナツツ食べたがつたのに、
輪じゃないドーナツがドーナツと呼べるのか!? いや、呼ぶことは
できない!」と、真ん中が開いていないという理由で新たにドー
ナツを買いに行かせた人が帰ってきてませんねえ。」

「そうそう。中にクリームのはいったやつは太るからね。ちよつと・
・太もものあたりが気になって・・・」

「いやいや、そんなことないですって。まだまだぴちぴちのお肌なんですから。」

「そ、そうかな？」

「それで、大事な用事は？」

• • • • •

（それでも思い出さないか……。もうちょっと独力でがんばってほしいなー、でも教育係じゃないからなー。しょうがない。）

「そういえば、姫が気になっていた見習いが給仕に就いてからちよつど三日目ですねー。」

それとなく、姫にそのことを（棒読みで）伝えるとようやく思い至つたらしく、あつと声をもらして頭を抱えた。

「やっぱーい！！また忘れてた！！」

（やっぱりかい！！）

一応、笑みを浮かべながらも心の中では、世話のかかる・・・とまでは言わないものの、若干そう思うことは間違いなかった。

ため息をつきながらも、胡桃は姫のために準備を既にしていた。

「はい、ここに服をおいときますね。」

「わあ、ありがとう！！気の利く。」

「くれぐれもお忘れ物をしないでくださいね。」

「大丈夫大丈夫！！」

おつちよこちよいな面があるのに言い切ってしまったため、胡桃の不安は増大するのだが、今回のようなことについてはまず失敗などしない。

これだけは失敗してはならないのだから・・・

「では、私は着替えてきますね。」

「うん。留守を頼むよ！」

「了解いたしました。お気をつけて。」

胡桃は、そういつて赤の長い髪のかつらをつけて衣服は姫と同じのを身に着けている。

「くれぐれも・・・」

「そう、心配しなくても大丈夫！！なんとたつて霊峰山なんだし。その子に力がなかったら、妖魔はこないんだし。それに何度もやってるんだから。大丈夫大丈夫。私にしかできないんだからちゃんとするよ！！それじゃー、行つてきますー！！」

世界には知る者と知らぬ者の二つがある。

知る者は少なく、好きこのんで教えるものもない。噂は流れる。それは紅姫と同じように信憑性なく・・・

二つを知る者にはこう伝わっている。

”妖魔”と”姫”の二つは、いわば陰と陽の關係に等しい。

各地に”姫”と呼ばれるものがいて、稀なる”靈力”をたくさん持っている。

その多大な”靈力”を行使して、”陰”Ⅱ”妖魔”を退治するのが”姫”の使命である。

もともと”妖魔”は夜にしか行動しない。また、主食は残念ながら”人間の負のエネルギー”Ⅱ”陰”・・・。”負のエネルギー”が食べられた人間は、死ぬか、妖魔が死ぬまで永遠に眠り続ける。先に肉体の寿命が来れば、そこまでの命。少しかだけ食われただけなら、満たされない充実感や満足感、不幸や絶望を感じながら生きることになる。

とりあえず、悪いことだらけになる。

だから、妖魔を倒すことのできる姫はできうる限り妖魔を無に返さなければならぬ。運がよければ、人にとって有益となるからだ。とはまあ言ったものの、死ぬといったって人のエネルギーが全て負のエネルギーにならない限り人が死ぬことは少ないけれど。

”負のエネルギー”は痛み、悲しみ、苦しみ、恐怖・・・人の忌み嫌うものが”負のエネルギー”をつくる元となる。

人が弱いからこそ生まれる”妖魔”、だから、その闇を照らすのもまた人である”姫”なのである。

霊峰山

「うつろ、いくら霊峰山だからって夜は怖いよ・・・。でも、仕事・・・ズズー（鼻水をすすする音）。しかも冷えるー（ぶるぶる）」

一人孤独に参道を歩き、姫から預かった手紙ではこの道をこのまま

行けば神社について、そこにこの手紙に載っている花がある・・・
たぶん、この地図はそういたいんだろう。

「っていうか、ここの山道結構きついんですけどー。ぜえぜえ・・・」

「とかなんとか言ってるうちに、鳥居が見えてきた。月の光は全くな
いけれど、星の光で何とか見える。」

「ようやく終点ー。でも暗すぎてよく見えないな・・・。明かりも
つてたかなー??」

なんとか階段やらスロープを歩いて神社に着いたものの、暗すぎて
何も見えないためポケットをこそそと探った。

「あ、・・・」

シュボツ・・・

「マツチあつたー！！いやー、多少心強くなるわね。さーて・・・」
さて、ここで私〃紫苑は何を見たでしょうか？

1、それはそれは美しい花の群生

2、大きすぎる花

3、自ら発光する花

「正解は、『4、なんか知らんけど光ってる大きな二つの目』・・・
ってなんじゃこいつー！！」

予想を裏切ってますいません（謝罪）

とりあえず、動きそうなので必死に離れようと試みたところ・・・
・・・追われました

「って、そんな余裕ないって！！！！　こいつって、もしかして

もしかすると”妖魔”！！」

はい、ずばりその通りです。

「食べられるー！！。うちはそんなにおいしいような子じゃないっ

てばー！！もと綺麗でかわいい子のほうがおいしいって！！」

こんな緊急時に他人のことなんて構ってられるか！！という心むき出しでとりあえず広い神社内を逃げ回っている。妖魔はのろくて大きな蛇みたいなので真っ黒。

「あつつ！！」

マツチの持つ所にまで火が来て、熱くなったので紫苑はそれを放り投げた。火は紫苑の近くの草の上で消えた。

「お前、”ちから”もってる？」

「へっ？？？？」

『お前、俺達と同じ感じる、霊力持ってるのか？？このさいなんでもいい。食わせる』

「知らないわよー！！！」

「トリアエズ、チカラハモラウ。」

嫌だ！！！！！！！！

そんなの聞きたくない！！

昔のことなんて、思い出さないようにしてるんだから！！！！！！！！

妖魔の聲が耳に響いて痛くなり、紫苑が目をつぶった瞬間、

妖魔は絶叫していた。

ぐ・ぎゃあ ああああ ああ！！！！！！！！！

「ふん、月の出ない今日を見計らつて出てくるとは、小生意気な妖魔だ。しゃべれるだけ力を持つていただけあるな。変な知恵を身につけているようだ。だが、所詮妖魔は妖魔。考えても所詮ここまでだな。」

凜とした高い声が、妖魔の声に混じって聞こえてきた。

若干涙が溜まってきた目を手でこすりながら振り返ると、暗い中でも分かる光り輝くような真っ赤な長い髪が垂れ下がった背中が見えた。

（赤い髪なんて姫様みたい・・・）

と思いながら、まさか姫がこんなところにいるなんてないわよねーと自分で思ったときから苦笑していた。

すると、女のひとがこっちのほうへゆっくりと向いた。

すかさず、紫苑は声をかけた。

「あの、あなたは??」

「怪我は?娘。」

「あ、ないです。助けていただきありがとうございます。一体どうやって・・・?あと、私は紫苑というので娘じゃなくてそう呼んでください。」

紫苑は目をつぶっていたため、妖魔がなぜ倒れたかは知らない。

「ああ、そうだったな。よし。」

一通り、聞くと一息ついてその人は言った。

「合格だ!」

「????????」

いきなり、何を言われたのか分からず紫苑の顔は固まっていた。

「そうかそうか。うれしすぎて、固まってしまったのか。まあ、遠慮することはない。十分誇らしいことだからな。胸を張っていいぞ。姫の傍仕えとして正式なことはこれから私こと五十六代目紅姫、紅いひめ姫くれなが直接教えてあげるから。」

「・・・え・・・てことは・・・」

頭の回転のひとしきり遅い紫苑はようやく事態が読めてきたようで何度も目をぱちくり、口はわなわなとふるえている。

「正真正銘の紅姫さま——————!」

紅姫こと紅蓮は自信たっぷりの笑顔で微笑んだ。

こうして、ようやく話は始まった。

物語の始まりはいつだって唐突（後書き）

ここまでお読みになられてお疲れ様です。

久しく後書きとか書いてないんですね。

ちよつと前に新型インフルらしきものにかかって、書いてインフル菌が読者に行ったらどうしようーなんて馬鹿みたいなことを考えてました。

すいません、適当な言い訳です。

まだまだ、稚拙な文章で紅蓮と紫苑を十分に発揮させられていませんが、これからも頑張りたいと思います！！

応援よろしくおねがいします！！！！！！！！！！

遅寝遅起き

とりあえず、何がなんだか分からないまま紫苑は紅蓮に連れ去られるような形で霊峰山を後にした。また、夜更けだったので詳しい話は次の日にまわされた。

結局、いまだに紫苑は詳しい状況がわからないままだった。

そんな感じで次の日」

紫苑はなんだかすっきりしていない感じで起きた。
いまだに寝ぼけ眼で頭がはつきりしない。

「・・・あ、！！！」

紫苑は何か唐突に短く言葉を発した。

因みに同室のセツナ先輩は既に仕事場に行ったので、部屋にはいない。

「昨日のは悪夢だったのか・・・。」

紫苑の脳内で何が起こり、何をもつてして昨晚起きた妖魔との出会いを悪夢としたのか全く不明な発言だが、ただいまそれを突っ込む人がいない。

「というわけで、今日の書類の確認から行きましょう！！」

どういうわけか分からないが、とりあえず紫苑のポジティブシンキングにより昨日のことは無意識のうちに頭の中で消去された。

だが胡桃先輩に言われたことはきちんと覚えていて、机の引き出しの上から一番上に毎朝連絡紙が入っているのは覚えている。

「さてさて、今日くらいは見習いの時の友達からの手紙が入っていたりして・・・ってそれはないか」

紫苑は苦笑しながら、一番上の引き出しを引いた。

パンツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

自分でもびっくりするくらいすごい勢いで紫苑は引き出しを閉めた。
「・・・はー・・・そんなバカな・・・」
後半は、若干絶望的な顔であった。

そんなこんなで紫苑はおおよそ中に何かがあるのか掌握した状態でもう一度引き出しを開け、中にあった紙を手にとった。紙は目立つように赤かった。

紙には以下のことが書かれていた。

『見習い給仕の紫苑へ』

「どうもご丁寧に役職名まで書いていただけて光栄ですけど、上の役職の人から”見習い”ってことを言われるのはちょっとム力つく・・・」

読みながら紫苑がちよこちよこ突っ込むのは無視して・・・

『あなたは無事に姫様付きの称号会得テストを合格しました。』

よって姫様付き見習い給仕の称号を獲得しました。

これからも見習いとしてより一層見習いの腕を磨くように精進してください。

なお、あなたがこの手紙を読んでいるときには既にあなたは寝坊しているでしょう。』

ここでまた、紫苑は現実に戻され部屋にある時計を見た。時計が指す時間は十時半。

紫苑が仕事を始めるのが十時。

よって遅刻決定!! 悪ければ減俸・・・
手紙にはまだ続きがあった。

『しかし、心配は要りません! 私の(権)力で今日は一日あなたは休みということになっているので、今日の午後二時に胡桃に話しかけて私の部屋まで来なさい。』

「というか、権力のところだけなぜに括弧つきなんだろう？」
突っ込みどころ満載の紅姫の手紙を読み終えて色々と気持ちがおさまらない点もあったが、紫苑は午後二時に胡桃先輩のところまで行った。

胡桃はちょうど（？）休憩中だったので、第二控え室でリラックスしていた。

そこへ、きちんと身なりを整えてきた紫苑が来た。

「胡桃せんぱーい。」

「紫苑じゃない！！よく眠れた？」

「ははは、昨日のことが悪夢だったのでまったくよく寝れませんでした。」

紫苑は素直にそう答えた。

「それもそうね。それにしても紫苑礼服装てるのねー。感心感心。」
「紙からすると姫様に会う気がしたのでとりあえず礼服装てきました。」

紫苑が着てきた服は赤い上着と赤いスカート。靴下は白。

「私のときは礼服じゃなかったけどねー。」

「・・・私のときは??」

紫苑は気にかかった点をそのまま口に出した。胡桃先輩も姫様付き何たちの称号を持っているということだろうか??

「そうよ。詳しいことはここじゃあ話せないから、そろそろ貴方を紅姫のところへ案内するわよ。」

紅姫 紅蓮

そんなわけで紅姫こと紅蓮くれんのところへ紫苑しおんはやってきた。

「失礼します。胡桃くるみです。紫苑をつれてまいりました。」

とはいいつつも、御簾みすがあつて、それに紅姫の影が映っている。

胡桃は先に中に入って、紫苑に中に入るように促す。

そして、胡桃先輩が障子を閉めた。

「あー、やっぱりこういうしきたりって面倒だわー」

唐突に胡桃は紅姫がいるにもかかわらず、その場に立って御簾の方へと歩き出した。

「ちょっと、先輩。姫様がいらっしゃるんですよ！？何やってるんですか？！ていうか、もう先輩いろいろと駄目ですよ！？ため口とか！！」

「なにいつてるの？紫苑、わたしはいつもこんな感じよ？ささ、紫苑もいつまでも座ってないではやくこっちに来なさい。」

そういつても紫苑は立たずに姿勢を低くしたままだったので、胡桃が手を引っ張って御簾まで連れて行く。

「うにゃあああああ、ごめんなさいい。謝りますから、減俸――」

（給料が減ること）と飯抜きだけはご勘弁してください、姫様あああ。」

狂気ぎみに紫苑は声を上げながら、胡桃は御簾を上げる。

姫様の顔が見れちゃう！！？？

紫苑は喜怒哀楽の狭間で、そんなどうでもいいこと一瞬考えたが、そこには着物を着た案山子^{かかし}が座っていた。

「

んにや？？？？

」

姫様↓案山子↓消えた↓さらわれた↓姫様付き給仕見習い失格↓七級降格↓減俸↓ご飯食べれない

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あ」

「うるさい！！」

胡桃による首への手刀により、紫苑気絶。

からの復活。およそ、気絶時間四秒という絶妙な胡桃の力加減。（
おおよそ、発揮されることが少ないであろうスキルの一つ。）

「あ、すいません。なんか気絶してしまいました。」

「まあ、それは見ての通り知ってるわよ。それより、問題はあなたの金と食い意地への短絡な思考回路よ？姫様給仕たるもの、もつとおしとやかに可憐でかつ優美に、優雅に、宮廷たちからも羨望のまなざしで見られるような女性でなければならぬのよ。この仕事は

男性と出会う可能性も大きいんだから。」

「あ、はい。分かりました。あ、でもこの状況ってーーーーー」

また、叫びだしそうになる紫苑を胡桃は口を塞ぐことによって、回避した。

「今、紅姫はこの隣の部屋で待機しているの。紅姫は高貴で特殊な方だから。」

「あーーーーー、だから私とは口を利いてくれなかったんですね！」

「・・・あんたって結構根に持つタイプなのね。」

とりあえず、と胡桃はそういつて御簾の向こうにある障子を開けて中に入る。

紫苑も胡桃の後を恐る恐るついていく。

「姫様！。紫苑を連れてきましたよー。」

胡桃はいつも紫苑に声をかけているように紅姫にも同じように声をかけた。

その間、紫苑は部屋の中の豪勢さに驚いていた。豪華という言葉はまさにこのためにあったんだと視覚をもってして実感した。

部屋には紅姫という言葉面、文字にふさわしい赤によって構成され

ていた。

高い天井には紅い布がひらりひらりと舞うように、天女の衣のように高いところに置かれていた。よほど、背の高い人でない限り手を触れることすら叶わないだろう。

吊灯籠つらゆりとうろうには火は入れられていなかったが、色は赤いのでまるで火が付いているようだった。

置いてある装飾品は白と赤と金による色合いが多かった。

テーブルは足が高く、それでいてしつかりと重厚に作られてある。テーブルの側面には彫刻があり、蔓がかかれてある。おそらく形からして、天寿蔓というありがたい草を模したものだろう。紫苑にはそれくらいは知っている知識も持っている。一応、給仕見習いですから。

椅子も卓と同様に作られてあり、背もたれの部分には彫刻家のインシヤルがさらっと書かれてあった。この椅子にも天寿蔓てんじゅつるが延びているように彫られていた。

卓の上には、かわいくてそれでいて優雅なピンク色のティーカップと何か書いていた紙と筆があった。

本棚には色んな本が適当に並べてあったり、積まれてあったりした。その形跡からして、姫様はなかなか勉強熱心のようだった。

絨毯は淡いピンク色の金のサクラの刺繡ししゅうが大きくされてあった。壁紙、唐櫃からびつ（クローゼットの用途）、鏡台きょうだい、化粧箱、目に見える全てが紅い。

そんな広い部屋の奥に、赤の天幕が張られた天蓋付のベットがあっ

た。なんて立派な御帳台だ。みちようだい紫苑の給料ではまず一生手に入らないだろう。

「あれー、姫様まだ寝ていられてるんですか・・・ヒメサマー、会いたがっていた紫苑がきてくれましたよー。」

とりあえず、天幕の外から胡桃は呼びかけたが手ごたえがない。とは言っても、天蓋からでも寝息は聞こえてくるので、間違いなく姫様はいる。

「困りましたね。もう昼の二時を回っていますのに・・・。紫苑、あなた中に入って姫様を起こしてきなさい。」

紫苑は部屋のある高価そうな壺や花瓶、香炉に焚かれてある香の匂い、硯箱ばかりに目がいつており、声をかけられてびっくりしていた。

「あ、はい。え?? 姫様を起こすんですか? 胡桃先輩やってくださいよー。」

「紅姫様の顔を間近で拝顔できるチャンスなのに、そんなに嫌がるなら私がやっちゃうけど・・・。」

「やつぱりやります!! やらせてください!!」

紫苑はあっさり胡桃にさせられる形で紅姫を起こすことになった。とはいえ、確かに紅姫に会えるまたとない機会、しかも寝顔、こんな機会ははつきりいつてもう二度とないだろう。と内心、紫苑は確信していた。

（姫様、寝起き結構激しいから紫苑大丈夫かな？？）

すでに姫様の寝顔を知っている胡桃からすれば、紫苑の期待とは方向が逆を向いていたのだが・・・。

もちろん、紫苑は胡桃の仕事が姫付き従者のトップとは知らないの
で、胡桃の思惑なんてちっとも知らない。そして、おそらく興味も
ないだろう。

「姫様は、急に起こすのは怒りを買うかもしれないからやさしくす
るのよ。」

「わかりました、先輩！！」

起こし方を教えてもらっても、胡桃に何の疑問も持たない紫苑。

多分、どっか天然なんだろう。ちょっと、困りつつも胡桃は紫苑に
天蓋に入るようにいった。

（ちよつとぐらい疑ってくれたら、私達の仕事について詳しく話す
予定だったのにー！。）

聞かれないことにやきもきする面倒見のいい胡桃だった。

天蓋内

普通のベットより遥かに広いベットは、人が軽く五人くらい余裕で

寝転がれる位のベットだった。

もちろんシーツは紅かった。

ひろーーーーー、と思いながら紫苑は人影を見つけた。

こんなに広いと一人で寝るのは逆にさびしいのかも……。

広い赤の海の中横たわる小さな背中を見て、紫苑は早く姫様を起こしたくなった。

さすがに遠いので、靴を脱いで、ベッドにあがる。ベッドはふかふかで少し眠気に誘われたが、仕事であるので我慢した。

（もう、二度と上がれないだろうからもったいないよー）

紫苑は頭をふって誘惑を断ち切る。

四つんばいになって、紅姫のところまで紫苑はやってきた。紅姫は仰向けになっていたので、寝顔が丸見えだった。

「わー、めちゃくちゃかわいいー」

髪は日々手入れされているから、さらさらでさわり心地がよさそう。なやわらくて明るい紅い色。

ベットは天蓋だから暗いが、それでも紅姫の肌は十分に白いことが分かる。まつげが長くて濃い。眉も凜としていて、きっと目を開けばよりかわいい顔をするんだろう。

身長は目測で紫苑と同じくらい。おそらく年も近いだろう。

「うう、頬つねってうにゅーってやりたい……」

身分上、自粛。

さて、仕事仕事。

「姫様、紫苑です。姫様に呼ばれてきました。起きてください。」

紫苑が優しく、紅姫に呼びかけると、紅姫はゆっくりと赤の瞳を開ける。

紫苑はそのまま姫を眠らせないように話しかける。

「姫様、紫苑です。呼ばれたので、参りました。」

「し・・・おん・・・???・・・あおい・・・かみ・・・」

姫様はまだ眠そうで紫苑の髪の色をつぶやいていた。

かわいいなあ、と紫苑が癒されていた瞬間！！

姫様は意外にも力のある腕で紫苑の胸をしっかりとつかんだ。

そのままの流れで、紫苑を抱き寄せる。

紫苑はなにがなんだかわからずに抵抗する暇もなかった。

そのまま姫は力づくで無防備な紫苑と唇を重ねた。

紫苑はなにがなんだか分からないまま停止。

目の前には真っ赤な瞳が二つ。見つめていると吸い込まれそうになったので、目を閉じた。すると、やけに口の中に意識が集中した。

というか、なにが吸われている感じがしなかった。

そんな感じで10秒くらい紫苑と姫様が唇を合わせたまま、酸欠状態におちいったところで急速に紫苑の意識が復活した。

[illegible]

とりあえず身体をねじって、全力で逃げ出そうと試みるが思いのほか細腕の姫様の拘束から逃げ出せない。攻撃するわけにもいかず、とにかく必死でもがいて、そろそろ意識が飛びそうなくらい頭がくらくらしでところどころでようやく拘束がとけ、唇が離れた。

紫苑は顔を真っ赤にして、脱兎のごとくベツトから逃げ出す。

出たところで胡桃がいたが、そんなことお構いなしに壁の近くまで逃走して、うずくまつた。顔がいままで生きてきた中でもっとも赤くなっているであろうことを感じるが、それ以上に恥ずかしかった。

[illegible]

紫苑は唇をさわりつつ、パニックに陥ってた。

「あちゃー、やっぱりそんなことになっていたか……」

紫苑の様子を見て、なにか思い当たることがあるように胡桃はつぶやいた。

紫苑に話しかけようとおもっていた胡桃だったが、まだ話ができる

状態ではなかった。

「紫苑にそんなことやったら、嫌われますよ。姫様。」

胡桃がそう話しかけると、天幕から姫様がようやく出てきた。

「おや、なんだ気絶してないのか。」

面白そうに顔をニヤつかせながら紅蓮は紫苑をウサギを追い詰めたオオカミのような目つきでみた。

因みに紫苑は恐怖感いっぱい紅蓮を見ていた。

紅蓮は、真つ赤な瞳、真つ赤な長い髪の毛、紫苑と同じくらいか少し高いくらいの身長だった。

そして、なにより人の上に立つような高貴感と威圧感を全開にしていた。

ククツ、と紅蓮は笑う。

「我は紅姫、紅蓮。ありとあらゆる妖魔を完全にはらう唯一にして絶対の存在だ。紫苑、貴様は合格だ。今日、現時刻をもって私に全力で仕えろ！！」

紫苑はその自信に満ちた表情をする紅蓮を、見て思った。

イメージ通り、というか聞いていた通りの人だけど！！！！！！！！！！

「いきなりキスするなんて聞いてなかったわよおおおおおおお
おおおおおおお!!!」

まさかのファーストキスが同姓で、しかも、初めからいきなりハイ
レベルだった。

紅姫 紅蓮（後書き）

かなり間あけてました。

こんなのろのろ進行の作者ですが、作品を読んでくれた読者様ありがとうございます。

結局仕事は金だ！！

「いやー、ごめんごめん。そんなに驚かせる気持ちはこちらには毛頭もなかった。いや、ちょっと下心ではあっただけだよ。」

「あっただんですか！？」

紫苑は紅蓮のおとぼけた会話に突っ込む。紫苑にとって、身分うんぬんの話は頭からすっぱり抜けていた。

「それにしても、やっぱり私が見込んでいた以上だわ！紫苑。」

紅蓮の一人称が我↓私に変わる。どうやら、じぶんのことを持ち上げるときに一人称を‘我’にするようだった。

「一体何がですか？紅蓮様。」

「私のことは友達のように紅蓮ってよぶのよ！」

いきなり、むちゃくちゃな命令だった。

紫苑は頭を抱えた。もちろん痛いわけではなく、この先が思いやられて仕方がないからだ。

「私が従者に求めるもの、それははつきりいつて力があるかどうか。霊力を少し持っているわけじゃなくて、普通の人よりかなり持っている人材を私は欲しているの。でもあんまりにも条件が厳しすぎて、常に人手不足状態だね。そんなときにあなたが、アンケートに参加

してくれていた！あのアンケート紙には小細工がされていて、その紙を使ったときにその人が力を持っているかどうか調べられる。その中であなたが一番大きな力を持つてるって分かったのよ。

あとは、靈山で妖魔に襲われるかどうかを調べて -

最終的に私が相性を調べるのよね。

あのキスは、まあ私にとっては靈力補給みたいな感じで、いつも他の従者がいたときに稀にするんだけど吸い上げすぎて、みんな気絶しちゃうんだよね！。

そんなところから判断すると、紫苑の潜在的靈力の大きさはなかなかのものだよ！

髪も青くて、私好みだし、年も近くて、友達ができたような気分だし！！

胡桃とかがいつも話し相手になってくれるんだけど、やっぱり年が一回り上なぶん大人びてるから、同じ位の年の友達がほしかったんだ！。

というわけで、よろしくねー」

はい、ちょっと待ったー！。色々知らないことが一気に出てきたぞ？

紫苑は紅蓮の言葉を頭の中で反芻する。

「胡桃先輩！！この前聞いたとき、紅蓮と話したことなんて一度も無いみたいなこといってませんでしたかー??？」

口調がとげとげしいのは、勘弁して欲しい。

すね。」

「わかったわよ。まあ、確かに紫苑はなんかひ弱だし。」

実際、紅蓮の拘束を解けなかった紫苑は紅蓮の言葉はズバリその通りだった。紫苑の顔が、かあつ、と紅くなる。

「じゃ、胡桃後は頼むわよ。今日はもう二人とも上がんなさい。明日から、また色々忙しく使う予定だから、しっかり休んで。」

そういうと、私達は放り出されるように紅蓮の部屋から出て行った。

宮廷・会議室

施錠付きの部屋で胡桃は紅蓮の世話役としての必要な仕事について、紫苑に話していた。

「基本、姫様は人の目の少なく、妖魔が活発になりやすい夜間に仕事をしているの。だから、私達は昼間、適当に仕事をするふりするのよ。」

そうして、一般に普通の姫だと思わせることが私達の仕事。

噂は多々あるけど、本当のことは何もないでしょう？

実際、宮廷内の変な権力争いに巻き込まれないように姫様の下には、妖魔祓いの専門集団を置いていて、それで実際の正体を周りに知られないようにしているの。

姫様は指揮をしているだけ、という形で、実際姫様の行った数々の

業績はその集団の功績ってことになっているの。」

「なんでそんなまわりくどいことしてるんですか？」

「妖魔避けだわね。妖魔が姫様を狙わないように、人の噂ではその集団がやっているようにすれば、姫さまへの害が少なくなる。妖魔被い達は襲われることになるけどね。」

姫様の持つ力は妖魔を祓えるけれど、もしその力が妖魔に与えられてしまったら・・・ってなるから、背に腹は変えられないわよね。まあ、妖魔被いの集団も好きでやってる仕事だから異論はないし。あと、これは姫様付き全員にいえることで、姫様付きのほとんどは霊力を持っているの。私もね。因みに、必要なら戦えるのよ。祓う力はないけど、護身用にね。」

まあ、それはいいとして、つまり私達は妖魔に狙われる可能性が大きい。だから、姫様たちに守ってもらうことになるの。」

そのかわり、妖魔をおびき出す仕事もあったりするんだけど・・・」

「それって危ないじゃないですか！！」

「まあ、大丈夫よ。姫様は歴代でも飛びぬけて強いから。あなたからすれば、そのお給料の大きさが十二分にわかるでしょ。むやみにそんな大きな大金には理由があるのよ。文句があれば、辞めることもできるけど？」

その分、ご飯の量が少なくなるかもしれないけど。そうなったら、あなたの祖父母たちはあなたのことをおもって少ないご飯をさらに少なくして・・・」

「いえ！！一生懸命、やらせていただきます！！」

「そう、じゃあ、そういう風に姫様にご報告しておくわね。」

胡桃は満面の笑みを浮かべて、そのまま去っていった。

「あ・・・」

紫苑は、我ながらお給料¥に対して、がつがつしすぎなのを自覚しながら、とぼとぼと部屋を出て行った。因みに、お給料の半分は養ってもらって祖父母達に仕送りしている。

「まあ、給料はいいし、服の紅色も好きだし、待遇のよさも他とは比べられないくらい良いからなあ・・・」

そう思えば、割り切れなくもないわよね。

と思う紫苑だった。

それじゃあ、いつちょ妖魔退治しますか？

とりあえず、ひよんなこと（アンケートに答えただけ）で紅姫に仕えることになった紫苑は、まあ初日から紅姫に会うなり事件（という名の試験、というかキスされたこと）にあい、晴れて、紅姫に認められて、正式な見習い給仕になった。

依然として、”見習い”の立場は変わっていない・・・。

「姫様、失礼します。」

決まりきった言葉で、紫苑は紅姫である紅蓮のもとに食事を運びに入った。

御簾の奥にいる案山子の傍を早々に通り過ぎ、さらにおくにある部屋に入る。

「し〜お〜ん〜！！」

妖気（紫苑にとっては。もちろん本当は能天気な、陽気）な声で紫苑の名を呼ぶ紅蓮。

「紅蓮！！今食事を運んでいて危ないので、まだ動かないでください！！」

少し、きつめな声音で話しかける紫苑。

と、いうのも・・・

つい、先日。

「お食事用意しました。」

と、御膳を運んでいた紫苑を見つけるなり紅蓮は、紫苑の腰に抱きつきにいったのである。

もちろんセクハラというほどのものではないであろう愛情表現の一種なのだろうが、そんなことはどうでもよく、よくなかったのはその紅蓮のタツクルに近い衝撃を受け止めきれることができなかった紫苑が、御膳を派手にひっくり返してしまい、辺りにある高価な品々を汚してしまい、その清掃代（もちろん清掃にかけてはプロ！の方々に頼むのであり、下手に給仕程度が手を出していい領域ではないのである。）をいきなり給料から差っ引かれることになった。

もちろん、紅蓮付き侍女をまとめる侍女長の胡桃さんによって……。

紫苑は笑顔のうらにある胡桃の目つきの恐ろしさを思い出していた。

「あのときの胡桃先輩は目つきで『大変なのは分かるけど、そんなことしていたら給料無くなっちゃうからね』っていったのよね……。あくまでも予想だけど。」

給料をくれる人、そして減らしていく人……紫苑の中で胡桃のポジションがどんどんお金関連へと変わっていく。

そんな紫苑にとっては重大なことが既に起こってしまっているのだ、二度とそのような失敗は犯さないように気を配っているのだった。

とは言っても、紫苑の言うことなんて紅蓮は大して聞いていないだろうとは予想するに難くないので、紫苑は膳を床にとっと置いて、御膳を無傷の状態で維持させ、変わりに紅蓮のタックルを受けた。

もちろん、すぐにどいてもらう。

基本的に一回抱きつけば気が治まるらしく、紅蓮は返事をして椅子に座ってくれるのである。

最終的には、紫苑はこの紅蓮のタックルも回避する予定にしているがまだそこまでは至っていない。

紫苑は運び終えたので、退出しようとした。

「ねえ、紫苑行かないで。さびしいわ。」

紫苑は振り返って、紅蓮を見た。視線が合ってしまった、当然紫苑は紅蓮の要望に応えてあげてしまうのである。

まあ、御膳を引き上げなきゃいけないし、これくらいだいじょうぶよね？？と紫苑は紅蓮の前の椅子に座るのであった。

紅蓮が食事を終えて、紫苑が御膳を引き上げようかな、と考えていた丁度そのときに胡桃が部屋に入ってきた。

「姫様、お食事が済みましたか。丁度いいところですね。紫苑あなたにも、用があつたんですよ。」

紫苑は片付ける手を胡桃にとめさせられ、目を丸くしつつ、胡桃に

座らせられた。

どこか、紅蓮も楽しそうであつた。

「ほんの少し前に被害があげられていた村なのですが、最近になって妖魔が活発になつてきたとの報告を受け、朝廷が討伐と地域の結界の点検を依頼されました。既に妖魔祓いの人には動いてもらつて結界の点検はさせているので、姫様には討伐をなさつてもらいます。紫苑、あなたにはなれてもらつたために囃役をしてもらいます。」

「ええ、いきなりですか!？」

「いやいや、紫苑。いきなりではないよ??二回目だ。私をはじめで、紫苑に霊峰にいつてくるように頼んだときがあつただろう??あれも立派な囃役だった。」

「それは、紅蓮が私のこと騙しただけじゃない!!これはいきなり、つて言うんです!!」

「まあ、それもそうなんだよね。」

自らそういつて、あはははは、と声に出して笑う紅蓮。

「つたく、とぼけてるんだか、狙つてるんだか」

そんな調子で、紫苑は呆れていた。というか、もうそういう役割にされていることを自覺していた。

まあ、つまり、紅蓮を楽しませる、という役割なのだが、如何せん馬鹿にされすぎな部分もある。

「そんなに、しよげないでよ。紫苑。この仕事は、また定期的な仕

事じゃないから別にお手当がでるの。もちろん、危険手当だから、それなりにいい給料だよ?」

「仕方がないから、張り切ってやらせていただきます!」

結局、都合よく使われる紫苑だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9537h/>

桜花姫伝

2011年10月5日06時22分発行